

障がいがある子どもの「社会認識」を育てる

土田謙次
小林幸雄
竹下忠彦

1 はじめに

特別支援学校では、盲・ろう・病弱校や肢体不自由校の一般学級、知的障害校高等部の学力の高い生徒たちのグループを除いて、「社会科」は教育課程の中に位置づけられていないことが多い。その理由として障がないことがある子どもたちには「社会科」は難しいから、教える必要はない。それよりも「ことば・かず」をたくさん教えた方がいいなどと言われる。

こうした認識を乗り越えるために、障がいがある子

に重い障がいがある子どもでも、「社会科」「社会認識の教育」は必要であると考えて実践してきた。

障がいがあるAさんが幸せに生きていく力は、認識面では、①自己認識、②他者認識を土台として、③社会認識、④自然認識という四つの認識が必要であり、このことは「学習指導要領」にも記されている(図)。

そして、この四つの認識の深化を助けるものが「ことば・かずの力」「コミュニケーションの力」などである。言い換えると「ことば・かずの力」「コミュニケーションの力」などをつけることも、四つの認識を助けるためなのだ。現場には、障がいの重い子は「自己認識」「他者認識」さえできればいいのであり、それ以上の「社会認識」は必要ないと意見もあるが、図の概念図にあるように「社会認識」「自然認識」は「自己認識」「他者認識」を土台としつつも、必ずしもそれらができないと発達しないというものではなく、別個の発達を遂げるものと考えられる。

障がいがあるAさんが幸せに生きていくためには、社会に適応する力」「社会性」を身につけることが大事だ。しかしそれだけではなく、さらに「よかれと思う社会を構想し、それを作り運営し、その社会をさら

どもたちにとって「社会認識」を育てるとはどういうことなのかを考えてみたい。

2 主権者として社会を変えていく力

中学校の障がい児学級の担任だった小林幸雄は二〇一一年の歴教協福岡大会のレポートで、「障がい者の教育に『社会科』を」と題して「……日本国憲法の人権・国民主権・平和を教育の基本におき、そこから社会認識の課題を教育課程に設定することが必至である……」と述べている。私たち(竹下・土田)も、どんな

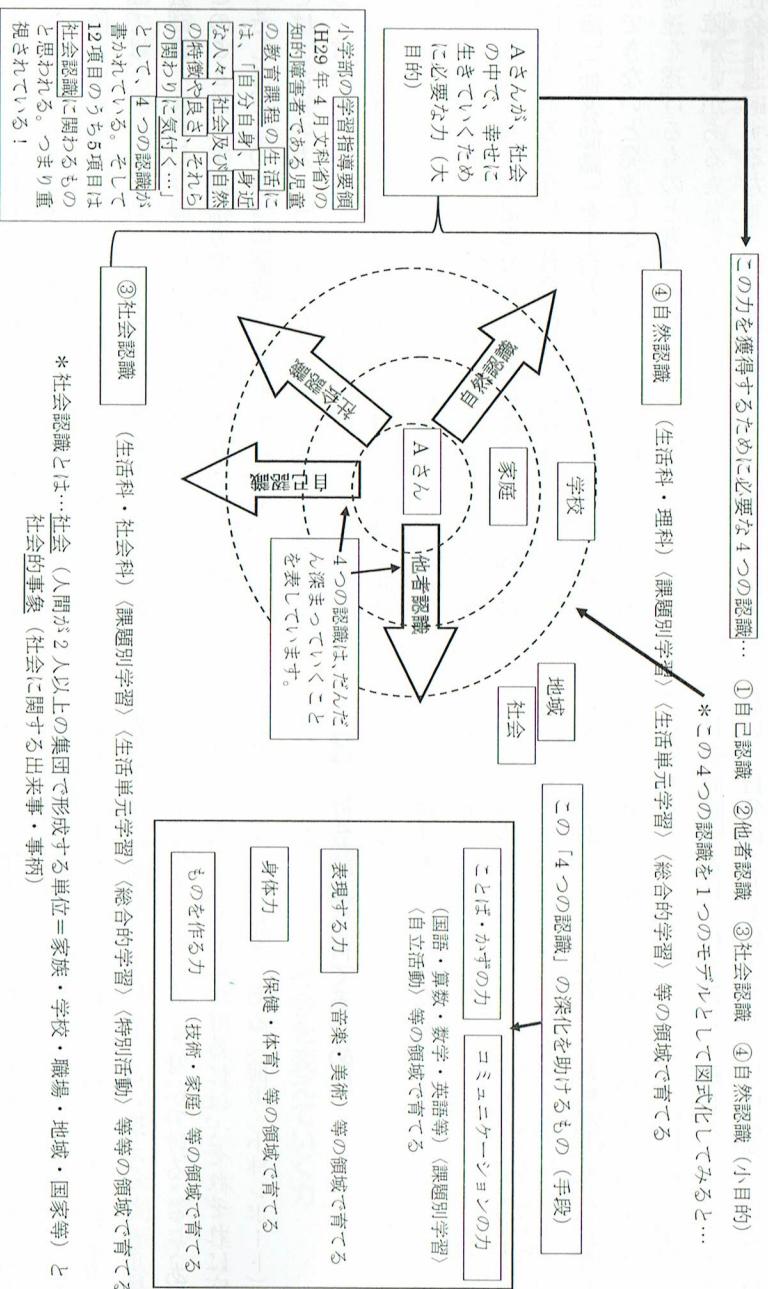
に良いものに変えていく力、その下地としての「十全な他者認識や他者への共感能力」¹⁾、「社会力」が必要であると言っている(門脇厚司『子どもの社会力』一九九九年、岩波新書)。それは、言い換えると「主権者として社会を変えていく力」を身につけることである。そしてこうした力を身につけるには、それぞれに応じた「社会認識」が必要である(前出・小林レポート)。

3 社会認識を育てるため

社会認識を育てることが必要だといつても「重い障がいがある子どもたちにそんなことができるわけがない」という声もある。しかし、どんなに能力が高くても、自分のことしか考えられない人がいる一方で、重い障がいがあつても「他者への共感能力」、つまりとも思いやりのある人がいることは、我々のよく知るところである。

「社会認識」とは、何も難しい理論だけをいうのではない。自分のことを知ること(自己認識)、他人(自分)の周りの家族や友だちや先生のことを知ること(他者認識)、そしてそれの人たちとコミュニケーションを

図 障がいがある子どもの「社会認識」の概念図



取り、仲良く一緒に勉強や作業をすると」と、喧嘩をしてしまったり、何か問題が起つたら、それを解決しようと試みること、そうした意欲や態度、能力こそが、「社会認識」の基礎となるものであり、よりよい社会をつくるていこうという主権者の基本である。

そこで私たちは、障がい児の教育に携わる人々に、ぜひ次節4の「社会認識を育てるステップ & 具体的方法（素案）」を参考にしながら、「社会認識を育てる授業」を進めてほしいと考えるのである。そしてそのためにも、私たちは前述の埼玉・小林のレポートや宮城・高橋誠の「社会認識の教育」に関する提言（歴史教育者協議会編『歴史教育・社会科教育年報』100四年版）〔三省堂、100五年〕を基に、①その理論化を試みるとともに、②それを育てるステップを整理し、③「社会認識」を育てる授業実践（レポート）を整理する作業もおこなってきた。以下その成果を紹介したい。

4 社会認識を育てるステップ & 具体的方法（素案）

- (1) 障がい児教育で「社会認識」を育てるステップ
- 通常学級における社会科の学習内容は、小学校一・

二年生の生活科からスタートするが、障がいがある子どもたちにとっては、まず「自己認識」「他者認識」からスタートする。具体的には、自分に自信が持てる自己肯定感を育てることを前提に、自分のことに興味・関心を持つことから始まり、自分のことを知り、知つたこと・考えたことを表現しようとすることへと発展していく。そしてさらに、それが家族や友だちのこと・に広がっていく。この考え方の参考になるのが、遠山啓氏の「原数学」に対応した「原社会科」という概念である（表）。そして、それらを土台としつつも、同時に「社会認識」の学習も始まり、家族のこと、学級のこと、学校のことを認識する学習をしていく。そこには「自然認識」の学習も入ってくる。その中で、子どもたちは「社会性」を身につける。

そして次にめざすべきステップは、「社会力」を身につけることである。これは、自分が生きる集団・地域・国などの矛盾に気づく、問題点を発見する、それを解決していくとする意欲と力をつける学習である。

私たちは以上のステップをより細かく「系統的・段階的にこういう力をつけていく」といった一覧表を作ろうと努力したが、現段階ではそれはかなわなかつた。

そこで次善の策として、「社会認識を育てる具体的な方法」を、「障がい児教育分科会」で持ち寄り、互いに

方法」を、「障がい児教育分科会」で持ち寄り、互いに

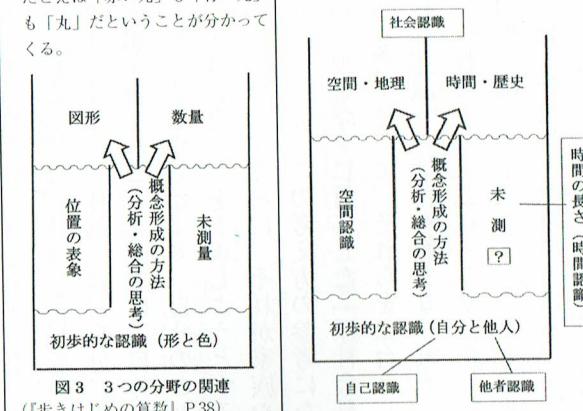
学習してき
たレポート
を紹介する
ことを試み
た。

表 遠山啓氏の「原数学」に対応した「原社会科」の概念案

本文「4」の「社会認識を育てるステップ & 具体的方法（素案）」を作る時に参考になったのが、遠山啓氏らの「原数学」の考え方（遠山啓『歩きはじめの算数—ちえ連れの子の授業から』（国士社、1992年））であり、それを社会科に当てはめた「原社会科」の考え方である。
(上記書 P20参照)

もちろん、「原数学」の考え方は、遠山氏の長年にわたる実践と理論化の成果であり、「原社会科」の考え方は、まだその表面をまねた、言葉だけのものではあるが、これからの実践を踏まえて、理論化していくべきだといふと考えている。

「原数学」	「原社会科」	備考
①「数量」の基礎にある「未測量」 = 数値化しない段階の量（大きい・小さい・長い・短い・多い・少ないなど） （『歩きはじめの算数』P.41）	①「時間的・歴史的認識」の基礎にある「未測？」 = 「対比」（新しい・古い・長い時間・短い時間など）。そのほかにも寒い・暑いなどもある？	例えば100年をどうとらえるか？（おじいちゃんのおじいちゃん等）
②「空間・図形」の基礎にある「位置の表象」 = 平面空間における物の位置関係（ここ・あそこ・上・下・右・左など）（『歩きはじめの算数』P.43）	②「空間的・地理的認識」の基礎にある「位置の表象」に当たるもの +（上・下・右・左・南・北・東・西・遠い・近い・広い・狭いなど）	こうして考えてみると、数学と社会の科学としての「原教科」は、共通する部分も多いので、子どもに教える場合も、共通して教えられると思われる。 →つまり「言葉」「数」だけでなく「科学」も加えて教えることが、4つの認識の学習につながるのではないか？
③①と②の基礎にあるのが「分析・総合の思考」の力。 ・赤い丸→2つある属性のうち一つだけを分析・抽出すると「赤い」と「丸」 ・色と形という2つの属性を同時に考慮し、総合すると「赤い丸」 *これらのことが分かってくると、たとえば「赤い丸」も「青い丸」も「丸」だということが分かってくる。	③①と②の基礎にあるのが「分析・総合の思考」の力。 ・昔の日本→2つある属性のうち一つだけを分析・抽出すると「昔」と「日本」・「時間・歴史」と「空間・地理」と言う2つの属性を同時に考慮し、総合すると「昔の日本」	



- (2) 社会認識を育てる具体的な領域として、
○ 行事の方法
○ 地理・空
○ 授業実践
○ レポートの具体的な領域として、
○ 認識
○ 歴史・時間
○ 間認識
○ 地
○ 域学習

- C 子どもたちが困っていること、抱えている問題、あるいはその子がやりたいことから出発すること（中学生とともに「社会」を学び、社会に生きる」埼玉・小林）【学び合い・育ち合う子どもたち】明日の授業をつくる】麦の会・品川文雄他、全障研出版部、二〇〇九年）
- D 授業の展開方法を工夫しておこなう（話し合い活動・学習のまとめとして絵画的に表現する・板書をノートする）が困難な場合には、模造紙を使い前時の学習につなげ
- B 社会科の授業以外でもできる（療育活動を取り入れた体育の学習）三重・田畠、二〇一七年）（卒後の豊かな生活を求めてー学校と施設の連携の模索】千葉・関根、二〇一二年）
- E 教材・教具の工夫をおこなう（視聴覚資料を多く使った実践例「歴史を通じて生き方を考えさせる」兵庫・谷、二〇一八年、調理教材も使った実践例「サルと人間の食べ物の違い」東京・竹下、二〇〇二年）。

5 今後の課題

私たちの次の課題は、先述した障がい児の社会認識を育てるステップをより細かく系統的・段階的に表した一覧表を作ることなどである。障がい児の社会認識を育てるることを視点においていた実践や研究は今、摸索の段階にある。私たちの研究を多くの方に読んでいただき、ご批判をいただきたい。

※障がい児分科会HP（<https://syougaikyouiku.jimdo.com>）に、関連資料を掲載している。（つちだけんじ・埼玉歴教協（こばやしゆきお・埼玉歴教協）（たけしたただひこ・東京歴教協）